

斧谷彌守

言葉の現在

ハイデガー言語論の視角

斧谷彌守一（よきたに・やすいち）

1945年生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。現在、甲南大学文学部社会学科教授。専攻、言語論・ドイツ文学。とくに、ベンヤミン、アドルノ、ハイデガーを中心に、20世紀の言語思想の捉え直しを行なっている。著書に、西川富男編『自然とその根源力』（『ドイツ観念論との対話』第2巻、ミネルヴァ書房、共著）、訳書に、『太古の夢・革命の夢』（『ドイツ・ロマン派全集』第20巻、国書刊行会、共訳）などがある。

言葉の現在——ハイデガー言語論の視角

1995年3月25日 初版第1刷発行

著者——斧谷彌守一

発行者——森本政彦

発行所——株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111

印刷——明和印刷

製本——鈴木製本所

© YASUICHI YOKITANI 1995
ISBN4-480-84233-0 C0010 Printed in Japan

乱丁・落丁の場合は、御面倒ですが下記宛に御送付下さい。送料当社負担にてお取り替えいたします。
御注文・お問い合わせも下記へお願いします。

〒331 大宮市柳引町2-604 筑摩書房サービスセンター 電話 048-651-0053

工業の現在

▼目次

江苏工业学院图书馆
藏书章

第一部 記号としての言葉 7

第一章 言葉は世界を非現実化する——言葉の幻想性 8

情報伝達手段としての言葉 コンピュータによる言語処理

言葉は不在の事物を表わす 心の中の幻 ソシユールの〈差異〉

第二章 言葉は世界を区切る——言葉の恣意性 29

アナログ音からデジタル音へ デジタル音からアナログ音へ

言語的相対性 「恋」から「愛」へ

シニフィアンとシニフィエの結びつき

第三章 ファジーな言葉と定義された言葉——自然言語と科学言語 53

自然言語の曖昧さ 自然言語の厳密さ

『砂の女』——科学言語から自然言語へ

第Ⅱ部 雰囲気としての言葉 75

第四章 言葉には翳がある——言葉のアナログ性 76

二律背反への疑問 「着衣」は「裸」 「白」は「黒」

「きれい」は「きたない」 翳のない世界 「夜」は「昼」

ハイデガーの〈アレーティア〉

第五章 言葉は雰囲気と同じものを集める——雰囲気的一性 99

幼児の前論理性 語の雰囲气的同一性 語の空間性・情調性
語の概念は揺れ動く ハイデガーの「自らの中へと戻り行くこと」
具体的状況からの出発 隠喩の生成

第六章 言葉は世界を孕む——雰囲気的空間 125

差異の網状組織 カントの「シェーマ機構」
ハイデガーの「引つ掻いた痕跡」による「デッサン」
語の雰囲气的空間 語はイメージを孕む 語は世界を孕む

第Ⅲ部 深淵としての言葉 159

第七章 言葉は響き合う——言葉のシンフォニー 160

語の多義性 「雪」は「愛」 「秋」の世界のシンフォニー
言葉の線条性 ハイデガーの「静けさの響き」

第八章 言葉は底なしの深淵である——言葉の魅惑と恐怖 190

言葉はシュルレアリストである 言葉の無的性格
言葉は天使である 人間の身体は言葉である

ベンヤミンの〈理念〉としての言葉 〈理念〉は世界のイメージを孕む
断片の収集・概念の作業 翳への〈注意深さ〉

参考文献

249

図版出典

257

あとがき

259

言葉の現在

——ハイデガー言語論の視角

写真 林 辰夫

遠本・善行 間村俊一

記号としての言葉

第一部



第一章 言葉は世界を非現実化する——言葉の幻想性——

情報伝達手段としての言葉 言葉とは、いかにも捉えどころのないものである。我々人間は、ものごとろがつく頃には、自然に言葉を話し始めている。幼年期、児童期の学習を経て、高校生くらいになると、使いこなせる単語や言い回しも増え、大人と同じレベルで言葉を使えるようになる。以後、たいいていの人は言葉についてのさしたる学習をすることもなく、ごく当たり前のこととして言葉を使い、そのことを取り立てて意識することもない。言葉は、無意識のうちに吸ったり吐いたりする空気のような存在となる。昔は、手紙を書く場合などに、否応もなく言葉を意識させられたものだが、今では、手紙を書く機会も減り、たいいていの用件は電話で済ますようになった。言葉の手応えを意識するケースは、減りつつあるように見える。

だが、他方では、我々が目にしたり耳にする、言葉による情報量は、昔とは比較にならないくらいに増えている。単に量の問題だけでなく、情報の中に占める映像の割合が格段に高まるという質的な変化も起きているが、映像情報が増えると、それに対するコメントという形で、言葉による情報も更に増大することになる。現代人は情報の海の中で溺れそうだ。

現代人は忙しい。ヘナウンサーがニュースを話す速度は、二〇年前一分間三百字であつたが、現在では四百字程度になっている。そうだ（月刊オーパス編集部編『日本語漂流記』S.T.O.）。ニュースキャスター久米宏の人気の秘密は、あの速いテンポの語りにあるだろう。現代では、あの速さを小気味よいと感じる人が多いのだ。

現代では、企業も個人も、有益な情報をいかに早く入手するかを競っている。その際には、言葉は情報の伝達手段として扱われていることになる。言葉が情報伝達手段として扱われるということは、言葉が、情報を伝えるための記号として使用されるということである。大事なのは、言葉ではなく、言葉の伝える情報なのであり、言葉それ自体は、情報内容を伝達すれば用済みとなる。ここで、言葉に求められるのは、情報内容をできるだけ早く、できるだけ正確に伝えることなのである。

例えば、中島みゆきのコンサートが四月一九〜二一日に東京の厚生年金会館で行なわれるとする。この場合に重要なのは、そのチケットの発売日や電話予約のための電話番号をいかに早く正確に知るかということである。そのために、いわゆる情報誌は、何種類ものインデックスを設けて、必要な情報に早く辿り着けるように工夫している。

こうして、手段としての言葉Ⅱ記号は早く処理できればできるほどよいとする言語観が生まれてくることになる。そのような言語観の凝集されたあり様が、コンピュータによる言語処理である。

コンピュータによる言語処理 コンピュータによって言葉を処理しようとすると、最終的にはコンピュータのハードウェアによって機械処理されることになるので、言葉は結局、0か1かという形で

デジタル的に処理できるものでなければならぬ。0と1のみで構成された2進数は、電子回路のスイッチの開閉によって完璧にパルス信号化できるので、機械処理には適しているが、あまりにも非人間的である。10010011 1111010 1001010 0111011 1000100 1101010 という2進数を読んで下さい。何という意味でしょう?と言われても、我々人間はとまどってしまふ。

そこで考案されたのが、いわゆるプログラミング言語である。フォートラン、ベーシック、C言語などのプログラミング言語は、2進数の非人間性を改善するために、人間が自然に使っている言葉、すなわち、人間の自然言語に近づけてある。もちろん、これらのプログラミング言語で組まれたプログラムは、最終的にはコンピュータのハードウェアによって機械処理されるわけで、そのために結局は0か1かという形でデジタル的に処理できるように工夫されていることは言うまでもない。

今や我々が日常的に馴れ親しんでいる、コンピュータと言葉との関係といえは、なんといっても、ワープロである。情報伝達手段としての言葉は、今や、ワープロに入力された上で流通するという形が圧倒的に増えつつある。ワープロに入力される言葉は、人間の自然言語そのもの、日本人の場合なら日本語そのものである。このことは、プログラミング言語が最終的に機械処理できるように考え出された人工言語であるのに対して、ワープロは自然言語を自然言語のまま扱うことができるということなのだろうか。そうであるとも言えるし、そうではないとも言えるだろう。

ワープロが自然言語を扱えるという側面を考えてみよう。我々は思いついた通りの日本語をワープロに打ち込むことができる。思いついた通りに打ち込んで後で自由に編集できるのがワープロの強みだ、と言われている。この原稿も、ランダムにワープロに打ち込んだメモを後で編集・加工すること

によって出来上がったものである。その意味では、ワープロは日本語という自然言語にほとんど完璧に対応してくれていることになる。ワープロは日本語を理解した上で機械処理しているように見える。例えば、「ことば」と入力した場合、ワープロには辞書が組み込んであるので、変換キーを押せば、直ちに「言葉」と漢字変換してくれ、「言葉」と画面表示される。いかにもワープロは「言葉」という語を理解しているように思われ、初めてワープロを使った人は「ワープロは頭がいい！」と思うようになることになる。

機械であるワープロにこのような変換が即座に行なえるのは、ワープロに、「ことば」(入力)↓(変換キー)↓シフトJISコード「8C BE」(言) + 「97 74」(葉)↓「言葉」という回路が初めから組み込まれているからである。シフトJISコード番号は2進化16進数で表わされているので、2進数に変えることができる。「言」の「8C BE」を2進数に変えると、「1000100 1011110」となる。シフトJISコードでは、「言」の次に「諺」が並んでいる。そのコード番号は「8C BE」であり、2進数に変えると、「1000100 1011111」となる。「言」と「諺」とは、最後の桁の「0」か「1」かの違いで識別されていることが分かる。ちなみに、「葉」のシフトJISコード番号「97 74」は、2進数に直すと、「1001011 0110100」となる。

こうして、我々が入力した日本語は、コードを介して、2進数によってデジタル処理されるのである。2進数は、電子回路のスイッチの開閉によってパルス信号に変わる。だからこそ、最終的な機械処理が可能なのだ。ここで、同じ文を2進数、16進数(シフトJISコード)、普通の日本語で記述したものを見比べてみていただきたい(図1)。2進数による記述は、いかにも非人間的に見えるが、

[2進数]

10000011	10001111	10000001	01011011	10000011	01110110	10000011	10001101
10000010	11001101	10010011	11111010	10010110	01111011	10001100	11101010
10000010	11110000	10010111	10011101	10001001	11110000	10000010	10110101
10000010	10111101	10001111	11100011	10000010	11000101	10001011	01000000
10001010	01000010	10001111	10001000	10010111	10011101	10000010	10110101
10000010	11000100	10000010	10100010	10000010	11101001	10000010	11100110

[16進数 (シフトJISコード)]

[日本語]

83	8F	81	5B	83	76	83	8D-82	CD	93	FA	96	7B	8C	EA	ワープロは日本語 を理解した上で機 械処理しているよ
82	F0	97	9D	89	F0	82-85-82	BD	8F	E3	82	C5	8B	40		
8A	42	8F	88	97	9D	82-85-82	C4	82	A2	82	E9	82	E6		

図1 2進数・16進数を読んでみて下さい

逆に、いかに機械的にパルス信号に変換することが容易かが、見て取れるだろう。

元の入力場面に戻ってみよう。「ことば」と入力して、「言葉」と漢字変換するか、「ことば」のままにするかは、その人の意志の問題である。あるいは、ことばとはそうごにえいきようをあたえあう」と入力したとしよう。変換キーを押すと、〈言葉とは相互に影響を与え合う〉と変換された。ほんとうに入力したかったのは、〈個と場とは相互に影響を与え合う〉という文だった。いったん〈言葉とは相互に影響を与え合う〉と変換されたものを、正しい〈個と場とは相互に影響を与え合う〉に修正するには、ワープロによる自動処理を棚上げにして、そこに人間の意志が介入しなければならない。ワープロを使っている人で、少し込み入った文を入力しようとして、このような羽目におちいった経験のない人はいないだろう。

つまり、入力場面のことを考えると、何を入力するかは人間の意志によるのであって、何を入力するかをワープロが自動処理してくれることなどありえないのである。入力場面でワープロにできることは、せいぜい、よく使われる言い回しを予め多

数用意しておいて利用者の便宜に供し、変換効率を高めることであり、このことこそ、AI辞書の果たしている役割なのだ。

自然言語を使って入力する内容はあくまでも人間の意志によって決まってくる。入力する内容は、あくまでも先ず、人間の心の中に存在するのである。いったん、入力する内容を人間が心の中で考え、ワープロの提供する選択肢から一つを選び取った後の過程は、ワープロが2進数によるデジタル処理を行なってくれるということになる。その意味で、ワープロは、自然言語を理解していない側面と理解している側面とを合わせ持っている、と言えそうだ。

だが、ワープロには自然言語を理解している側面があるというのは、本当だろうか。ワープロに自然言語が扱えるのは、人間が自分の意志でキーボードをたたき、言葉を入力するからである。音声入力ということになれば、キーボードをたたく必要はなくなるが、その場合でも、人間が自分の意志で音声を発することになるので、結局は、そこに人間の意志が介在するという事情は変わらない。自動読み取り装置を使って言葉を読み取らせる場合にも、読み取られていく原文そのものは、やはり人間の意志が介在しなければ存在しえない。いずれにしても、人間の意志があつてこそ、言葉が生まれるのであつて、コンピュータは、人間が生み出した言葉を機械的にデジタル処理するだけなのだ。コンピュータによるこの機械処理を「理解」と称するのは、いささか無理というものだろう。

言葉は不在の事物を表わす　そもそも、コンピュータに、機械的とはいえ、とまかく自然言語の処理が可能なのは、なぜなのか。前述したように、人間が言葉を入力するからである。では、なぜ自然

言語はキーボードによって入力できるのか。そんなことは問題にもならない、言葉をキーボードによって入力することは、人間が声を使って言葉を発したり、文字を紙の上に書きつけたりと同様に、いまさら論じるまでもない自明事ではないか、と言われそうである。だが、実は、人間が声を使って言葉を発したり、文字を紙の上に書きつけたたりすることができるといふ点にこそ、我々が普段は意識していない、言葉の根本的な性質が潜んでいるのだ。

例えば、関西のAさんがグループで富士山に登ったとしよう。新幹線から富士山の雄姿が見えてくると、その人たちは、富士山を指差しながら、へもうすぐあの富士山に登るんだね」と話し合うだろう。いよいよ富士山に登り始める。遠くから仰いでいた端正な姿とは似ても似つかないごつごつした岩肌や石の塊の連続だ。その人たちはへへ、富士山って荒々しいんだ!」と言い合うだろう。頂上に着く——へワアー、感激だ! ついに富士山に登ったぞ!」。

これらのへもうすぐあの富士山に登るんだね、へへ、富士山って荒々しいんだ!、へワアー、感激だ! ついに富士山に登ったぞ!」という言葉は、いずれも実際の富士山を目の前にして発されている。ここで、「富士山」という語が、目の前に見えている現実の富士山を指し示していることは言うまでもない。語によって指し示される現実の事物を指示対象と言うが、この場合には、富士山という指示対象は現実を目の前に見えており、「富士山」という語と富士山という指示対象との間の照応関係には疑いの余地がない。

Aさんたちが関西に戻ってくる。Aさんは、富士山を実際には見たことのない家族に土産話をする——へ富士山って、確かに遠くから見ると、写真の通り、絵のように美しい山だけど、近づいてみる

と、きれいなだけの山じゃない。なかなか荒々しい迫力のある山だ。その土産話をしているAさんには、今は、富士山が実際に目の前に見えているわけではない。にもかかわらず、Aさんは、体験してきた富士山のことをまざまざと語る。ましてや、その土産話を聞いている家族にとつては、実際の富士山は見たことのない山である。にもかかわらず、家族は、語られる富士山の話から、写真やテレビで知っている富士山のイメージを修正して、あるがままの実際の富士山の姿を知ろうと努める。

ここに、記号としての言葉の魔術が働いている。言葉は、目の前に現実の事物が存在しなくてもその事物について語ることを可能にする。言葉は、いわば、現実の事物の重量を抜き取って、持ち運び可能なものとするのである。ここでは、実際の富士山の意外な実体が問題になっている。しかし、その人が実際に富士山まで足を運んだからといって、その意外な実体を家族に示すために、現実の富士山を持ち帰ることなど、不可能だ。ところが、「富士山」という語にしまえば、どこにでも楽々と持ち運ぶことができるようになる。不在の事物について語ることを可能にするという点にこそ、言葉のもつ最大の特質があるのだ。

「富士山」という言葉（語）は、現実の富士山を非現実化し、持ち運び可能なものとする。もちろん、同じ働きをするのは、言葉だけではない。その人は、富士山の荒々しい岩肌を写真に撮ったり、スケッチしたりするかもしれない。富士山の写真やスケッチは、言葉と同様に現実の富士山を非現実化し、しかし、言葉よりも具象的な形で持ち運び可能なものとする。

このように、現実の事物を非現実化しつつその事物を表わすものは、記号と呼ばれる。言葉も写真もスケッチも、そのような記号の一種である。現実の富士山が目の前に見えなくても富士山について